教育心理学教室教官の研究状況報告

研究経過報告——3年目——

村上　隆

また1年が過ぎた。最初の2年間に比べれば，比較的充実した年であったように思う。52年8月から53年7月までの経過について述べる。

(1) 3相データ解析

前年に引き続き，後藤宗理，辻本英夫両氏とともに検討を行なった。その一部は，行動計量学会第6回大会に発表，また本紀要にも共同で執筆した。これらは一応の里程標であり，将来への"たたき台"にすぎない。現在のところ3相データ解析と言っても，通常の因子分析への reduction と3相因子分析をとりあげているにとどまるが，今後は更に他のモデルにも手を広げていきたい。モデル構成の面から見れば，この領域は極めて豊かな可能性を持つように思われる。適用とモデル開発の両面から，本年も最も力を注いでいきたい領域である。

(2) 職業レディネステストの分析

やはり3相データの問題で，雇庸促進事業団職業研究所との共同研究である。データは，同研究所開発の"職業レディネステスト"を，広島県下の中学生，高校生にそれぞれ3年間連続して実施したものである。分析にあたっては，専ら通常の因子分析（我々の本紀要論文の表現によれば方式Aと方式Cの併用）によった。時間的に一貫した因子と，そうでない因子（一種の分化過程を示すように見えるもので，対人的職業への興味にあらわれる）が分類される等，幾つかの興味ある結果が得られている。これは職業研究所の川上善郎，松本純平両氏と，同研究所紀要に執筆の予定である。

(3) 心理物理的尺度構成

このテーマが現在でも私の mentality に一番合致しているらしい。やはり実験心理学が私の研究上の故郷なのである。今回は昨年予告の difference scaling の実用化に向けて，実験時間（所要試行数）の短縮をはかる工夫を行なった。ORDMET法により部分情報によって解を求めながら，次の試行の呈示刺激を不況情報を補うように求めていく，という computer との interactive なやり方を考えた。実験の実施には大型計算機との対話が必要となるが，これは端末を持たない現状では不可能なので，あらかじめ作った数表を利用した実験を行ない，一応の実用性は確められた。これについては，日本心理学会第42回大会で発表される。現状では大型計算機を利用したとしても，刺激の数が少ない場合（10程度まで）にしか使えないが，計算方法の単純化を含めて，大型計算センターシステムⅡを利用した実験を行なうことを計画中である。

(4) 小論文の評価法

入学者選抜方法研究委員会の研究の一部として開始した。おおよその枠組については，同委員会の報告書に記したが，主観的評価法の信頼性の評価という点に問題を絞り，検討をすすめている。私の従来の研究方向とは全く異質のものであるだけに，いささか戸惑いもあるが，現実の問題領域に近いところで仕事をする面白さを感じていることも事実である。もっとも問題そのものを，種々の理由からかなり一般化せざるを得なかったが，このテーマについてはできる限り早急にまとめを行なう予定である。

研究経過報告

鹿内啓子

1. 個人研究について

帰属作用における個人差の問題に関心をもち，とくに self-esteem が及ぼす影響について研究を少しずつではあるが進めてきた。帰属作用の枠組の中で扱われている領域は近年拡がってきているが，現在のところ，オーソドックスな領域の一つである行動の結果（成功・失敗）についての帰属作用に及ぼす self-esteem の影響を研究してきた。

一昨年度の日本心理学会第40回大会において発表した，中学生を被験者とした集団実験の結果は，今年度の実験社会心理学研究第18巻1号に発表される予定である。また，この実験での不備な点を補い，また年齢の異なった大学生を被験者として昨年度実施した実験の結果は，今年度の日本心理学会第42回大会で発表する予定である。達成動機を帰属作用という認知的な働きの観点から捉えようとする試みがなされてきているが，本年度は，self-esteem の高低による帰属作用の差異が達成動機にどうかかわるかを，現実的な場面で研究することを考えている。また，これまでは自己の行動の結果についての帰属作用を扱ってきたが，今後は他者の行動の結果についての帰属作用に及ぼす self-esteem の影響を検討していきたい。

2. 共同研究について

昨年度から今年度にかけては新しくデータを収集することをやめ，すでに収集してあったが分析されていなかったデータの整理や分析にかかった。これは，1972年